

よみがえれ！  
有明訴訟弁護団  
(後藤富和)発行  
092-512-1636  
090-9602-0700

# 赤潮、貧酸水「原因は諫早閉め切り」

## 諫早の講演会で熊本県立大堤教授

### 有明海の大規模な赤潮発生のメカニズムについて 解を深めた講演会

【長崎新聞・10月24日】有明海の漁業不振を引き起こしている大規模な赤潮、貧酸水をテーマにした講演会が23日、諫早市内であり、熊本県立大の堤裕昭教授(54)が「諫早湾の堤防閉め切りが大規模発生の原因だ」と指摘した。

堤教授は湾が閉め切られた1990年代末から、赤潮発生の原因となる海域への栄養塩の負荷は増えているのに赤潮の大規模化が進んでいると説明。

原因として、湾を構造物で閉め切ると、干潟だった時に比べて河川から流入する淡水と海水をかき混ぜる力が弱くなり、塩分濃度が薄く富栄養化した表層になる「塩分成層」が湾付近で発達すると解説。これに閉め切りで弱まった潮流も相まってさらに淡水、海水がかき混ぜられず「赤潮と貧酸水の発生」の起点になっている」とした。有明海では、植物性プランクトン「

シャットネラ・アンティーカー」が原因の赤潮が2年続けて猛威を振るい、島原半島沿岸などで大量の養殖魚がへい死。堤教授は諫早湾内や島原半島沿岸の赤潮発生の分布図を示しながら「調整池からの排水が半島沿いを沿って流れ、直接的に影響している」と話した。講演会は同市の市民団体が企画し、市民約60人が参加した。

### COP10「諫早事業見直し迫る」日弁連

わが国のすべての弁護士で構成される日本弁護士連合会(日弁連・宇都宮健児会長)は、現在、名古屋市中で開催中の生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)において、緊急の保全の必要があるホットスポット6か所を取り上げて、日本政府に対して事業の見直し等を迫っている。とりわけ諫早湾干拓事業に対して、日弁連は過去8回にわたって意見書等を発表し、日本政府に対して、事業の見直しや水門の開放を求めて

きた(以下COP10会場で日弁連が配布しているパンフより引用)。「事業に着手した1990年頃から諫早湾近傍場を中心に漁獲量が減少しはじめ、1997年に潮受堤防が締め切られた後、有明海全域の環境が悪化し、多くの生物が死滅し、未曾有の漁業被害に見舞われた。有明海沿岸地域では漁業者の自殺が社会問題となっている。2008年、佐賀地方裁判所は、日本政府に対して、諫早湾干拓事業潮受堤防の水門の開放を命じた。しかし、日本政府は控訴し、現在も福岡高裁で審理が続いている。日弁連は、1990年代から諫早湾干拓事業の中止や、潮受堤防の開門を要求する意見書等を8回にわたって発表し政府に対して事業の見直しを迫ってきたが、未だ、日本政府は、開門に関する態度を明確にしていない。」



COP10の日弁連のブース(名古屋市)

### 「もう限界です」有毒アオコで漁民らが開門調査要求へ

【週刊金曜日・10月22日】かつてはムツゴロウなどが棲息し、水質浄化能力も高かった長崎県・諫早湾が今、有毒なアオコで汚染されている。諫早湾内三漁協のうち一つが全会一致で開門調査賛成に方針転換。

潮受け堤防の排水門から諫早湾に排出され、近くのカキなどがアオコの毒素に高濃度に汚染されていることが高橋徹・熊本保健科学大学教授(海洋生態学)の調査で明らかになった。高橋教授によれば、アオコの毒素ミクロシスチンは肝臓に影響し、最も毒性の強い種類のミクロシスチン-LRの急性毒性は青酸カリの20倍だ。(略)昨年末、同教授は農林水産省や長崎県などに地元住民に沿岸の魚介類を食べないよう警告することや詳細調査を行政が行うことなどを要望した。だが、黙殺も同然だった。農水省は、「アオコはどこにでもある」と問題視していない。だが、高橋教授は「これはとてもズルイ言い方です。『だから安全だ』とは言わないのです。後で問題になったら責任を問われますから」と批判する。このままでは汚染は食物連鎖で濃縮され、諫早湾から有明海にも広がる。またアオコの混じった水が農作物に使えば、ミクロシスチンが農作物に残留する危険性もある。